

IV-99

学園都市における就業者からみた職住近接型都市形態

早稲田大学大学院 学生員 正野陸朗 早稲田大学理工学部 正員 尹 祥福
早稲田大学大学院 学生員 赤松宏和 早稲田大学理工学部 正員 中川義英

1. はじめに

職住近接型都市は通勤ラッシュからの解放や通勤時間の短縮によって、就業者が快適に暮らせる街となっている。しかし、職場と住居があまりにも近すぎると公私の区別が付けにくく、自宅においても会社に縛られる感じがしたり、帰りにお酒を飲んで交流を図る「ノミネーション」が減ったりするという新たな問題が起こっている。

そこで本研究は、職場と住居の適切な位置関係があると考え、関西文化学術研究都市（これ以降学研都市）を例に挙げ、学研都市に居住している就業者にアンケート調査を行った。それにより、個人の生活によってどのように都市の形態を捉えているのかを把握し、どういった属性がどのような都市形態を選択するのかを明らかにする。ここで言う「中心市街地」とは商業・文化地区であり、職場・住居と同じ学研都市内にあるものとする。また、実生活として、最もよく利用する場所であるとする。

2. 職住近接型都市としての学研都市

学研都市内にある企業 53 社に対して、電話調査を行った。その結果、就業者 1,940 名のうち学研都市内に居住している人は 168 名（8.7%）であった。

このように職住近接型が成り立っていない理由として、次のようなことが挙げられる。

- 公共交通整備の遅れ
- 学研都市内の土地や住宅の価格が高い
- 企業の職住近接型都市に対する関心の薄さ
- 職場と家庭を行き来するだけの閉鎖的なイメージ等

3. アンケート調査

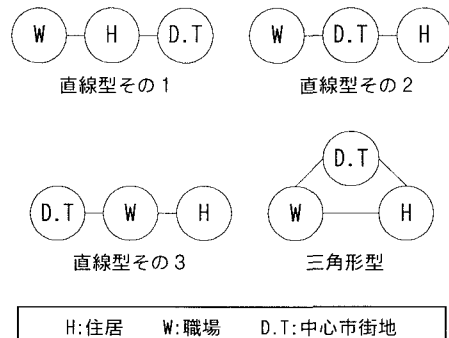
学研都市内に居住している 168 名に対し、アンケート調査を行った。有効回答数 110、回収率 65.5%であった。住居に関しては、ほとんどが持ち家である。アンケート内容は表一に示す。

表一 アンケート内容

分類	アンケート内容
都市形態の把握	現在の都市形態
	理想的な都市形態とその理由
属性	家族構成
	年代
	職種
	仕事帰り、一週間にお酒を飲む回数 ^{*1}
	仕事帰り、一週間に趣味を楽しむ回数 ^{*2}

(1)理想的な都市形態選択とその理由

図一1の四つの都市形態^{*3}の中で理想とするものに関して、調査を行った。また、その理由も尋ねた。現在住んでいる都市形態の割合とともに、図一2に示す。



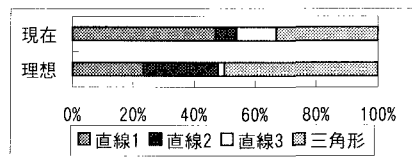
図一1 理想的な都市形態

直線型その1は、通勤時間の短縮や職場・住居の環境といったように、職場～住居のラインを第一に考える人が多い。その際に中心市街地の設定場所を考えた場合、日常生活から住居側に置くことになる。

直線型その2は、会社の行き帰りに中心市街地に寄ることが大きな理由となっている。また、職場と住居に中心市街地を挟むことで、気持ちの切り替えができるという精神面から見た理由も見逃せない。

直線型その3は住居と中心市街地が離れているため、住環境としては良いのだが、家庭での生活に不自由である。また、通勤が自宅から中心市街地方向なので混雑することが予想される。その点で、選ぶ人が少ない。

三角形型はそれぞれのアクセスが便利である点が一番大きい。さらに三つの機能が独立し、距離を取った方が落ち着くという意見も多い。



図二 理想的な都市形態の選択と現在の都市形態

キーワード：学園都市、就業者、職住近接型都市、都市形態

連絡先：〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 51-15-11 TEL：03-5286-3398 FAX：03-5272-9975

理想的な都市形態を見ると、三角形型が半数を占め、三つの機能の相互性が非常に重要であることが分かる。また、直線型その1・2はそれぞれ25%ずつ占めている。しかし、現在住んでいる形態の割合からの減少を考えれば、直線型その1は再検討する必要がある。

よってこの時点で、三角形型と直線型その2が学研都市の適する都市形態であると考えられる。

さらに、現在と理想の都市形態が異なるということは、自分で家を購入しておきながら実際の住居選択には都市形態を余り考慮していないと言える。

(2)理想的な都市形態の選択における属性

理想的な都市形態の選択における属性に関して、調査を行った。方法としては、項目別に現在住んでいる都市形態と理想的な都市形態の二つを比べ、その変化を分析した。

単身者(図-3)や50・60代(図-4)、管理職の人(図-5)は、現在と理想の都市形態は余り変化がない。その変化の大きいことが自由に都市形態を変えるのに抵抗がないと考えれば、単身者や高齢者は都市形態を変えるのに抵抗があると言ってよい。これは家族への配慮がいらないことや今後の勤続年数の少なさに影響する。よって、単身者には通勤優先の直線型その1が多い。

しかし、家族と一緒に住んでいる人(図-3)や20~40代(図-4)は、現在と理想の都市形態が大きく変化している。これは高齢者に比べて今後の勤続年数があるので、より良い環境で暮らしたいという意志が強いためである。また細かく見ると、直線型その1が減少し、直線型その2、三角形型が増加している。これは中心市街地を職場よりも住居の近くに置き、家族の便利さを優先させる、あるいは職場と住居を離し、独立を図ることによる。

またその中で図-5を見ると、研究者は三角形型を選択する割合が大きい。それは勤務時間が不規則な職種だけに、職場、住居、中心市街地のそれぞれへ行き来しやすい点を選択しているからである。

一方お酒を飲む回数や趣味を楽しむ回数は、選択する都市形態に影響を与えなかった。

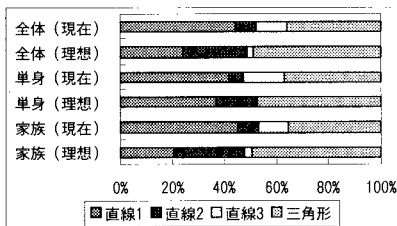


図-3 家族構成別による理想と現在の都市形態

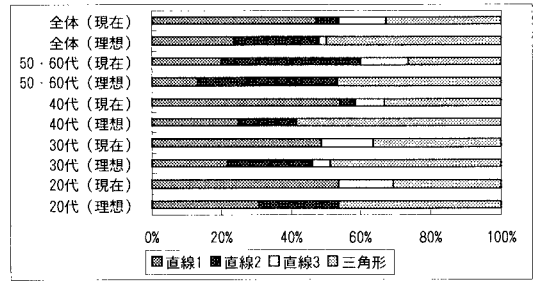


図-4 年代別による理想と現在の都市形態

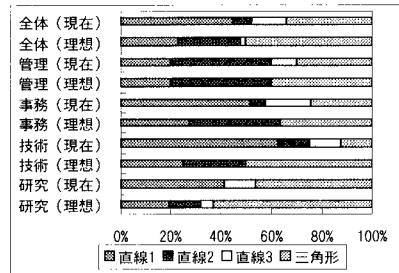


図-5 職種別による理想と現在の都市形態

5. まとめ

都市の形は個人の生活範囲や生活スタイル、考え方によって変わってくる。その中、今回の研究で明らかになったことは、20~40代の家族持ちの就業者は自分の生活よりも、まず家族の生活を優先させるような都市形態を考えているということである。また、職場と住居の切り離しを望んでいる。

20代は既婚者の割合が30・40代に比べると小さく、自分で家庭を築き生活をする年数が浅い。そのことを考慮に入れると、今後の学研都市整備にあたって、30・40代の家族を中心とした意見を反映し、直線型その2や三角形型のまちづくりが期待される。その中でも研究者は三角形型を望むことになる。

学研都市においては、30・40代の家族を中心としたまちづくりを行うと結論づけた。しかし、単身者や高齢者が住めなくなる都市であってはならない。特に退職した後の生活をどうするか、という問題が起こってくる。その点が今後の課題である。

また、都市の形態は見えてきたが、都市を構成する2点間の距離が変化することによって都市そのものが変わってくる。都市の規模も考慮する必要がある。

《補注》

*1・2 ここでは仕事が終わって帰宅する前に酒を飲む回数および趣味の回数であり、家庭での飲酒、休日の趣味は含まれない。

*3 この研究では、都市形態の距離は考えない。

《参考文献》

関西文化学術研究都市機構：
関西文化学術研究都市, Vol.1・2, 1994年10月